

特集 育てる会創設者 青木孝安会長を偲ぶ 〈みなさまと振り返る在りし日の姿〉

令和五年八月三日、育てる会創設者である青木孝安会長が九十三年の生涯に幕を閉じました。

昭和五年に信州松本に生を受けてからは、その人生の大半を教育界に身をおき、学校教員時代に自らの教育理念を育んだ後、自然体験・生活体験を柱にした青少年教育団体育てる会を設立し、我が国初の山村留学を開設するなど、体験教育活動の実践にその人生を捧げてきました。

これらの活動を進める中で、会長は多くの方々に出会い、支えられながら、自らの信じる道をまっすぐに生きてきた人生だったのではないかと思います。皆さま方の生前のご厚誼に、あらためて厚く御礼申し上げます。

さて、私は会長と数多くの会話を交わしてきましたが、中でも心に残っている会長の言葉として次のようなものがあります。それは、「物事には誠意を持ってあたねばならぬ。但し、その誠意には心が伴わねばならない。心のあるなしは、必ずや相手に伝わるものである。そして心ある誠意は必ずや自らの人生を豊かにするものである。」というものです。加えて「農の心、人をつくる」とも。

これらの言葉は、会長が設立した本会の様々な体験活動は、真の誠意に必要な心を体験によって育み、その原点は農の心にあると教えてくれているように思います。

本号の特集は、先の本葬儀にて会葬者の方々から頂いた温かいお言葉、そして追悼の寄稿をご紹介させて頂きながら、亡き会長の足跡を辿り、故人を偲ぶことができればと思っております。また、私を含め本会職員一同、亡き会長の遺志を継ぎながらより一層本会活動の推進に努力してまいる所存です。今後とも皆様方のご支援ご協力を賜りたく、宜しくお願い申し上げます。

公益財団法人育てる会 代表理事 青木 厚志

創設者 青木孝安と育てる会のあゆみ



● 1972 年頃

八坂センター建設地の視察、新たな山村留学の歴史がスタートした



● 1974 年頃

教育理念に賛同する保護者とは数多くの懇談会を開催した



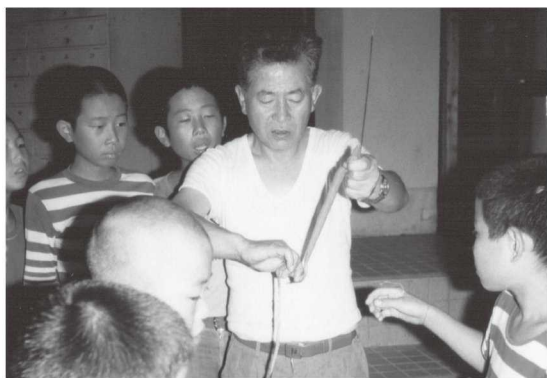
● 1980 年頃

囲炉裏を囲んで、熱心に子どもたちと語り合う



● 1980 年頃

子どもたちと寝食を共にし、生活体験にも重きを置いた



● 1980 年頃

ヘビの皮をむく青木会長、子どもは釘付けだった



● 1980 年頃

自然観察指導であろうか、山々を精力的に歩いた



● 1990 年頃

南国無人島の活動にて、
貴重な水を分け合う



● 1994 年頃

東京本部にて共に歩んできた楠本事務局長と。在京中は省庁などと様々な協議を重ねていた



● 1995 年

安曇野文化大賞を受賞。
山村留学の創設は青少年
教育に新たな道筋を示す
ものだった



● 1998年

会創立 30 周年式典では、子どもたちの和太鼓が会場に響き渡った



● 2006 年頃

晩年を過ごしたすずらん山荘、週末活動でも子どもの指導に立った



● 2016 年

叙勲祝賀会にて、長年の教育界への功績は多大なものだった



● 2018年

会創立 50 周年記念式典には
多く子どもたちと保護者や関係者が集った

略 歴

昭和 25 年 3 月 長野師範学校卒（現信州大学教育学部）
昭和 25 年 4 月 長野県上伊那郡河南中学校教諭
昭和 28 年 4 月 東京都墨田区立両国小学校教諭
昭和 41 年 4 月 東京都新宿区立天神小学校教諭
昭和 42 年 3 月 同校依願退職
昭和 43 年 4 月 教育団体「育てる会」設立、理事長就任
昭和 47 年 4 月 財団法人認可、理事長就任
平成 26 年 4 月 公益財団法人認定、会長就任

受章・受賞

昭和 34 年 10 月 学校放送設備改善論文賞（日本放送協会）
平成 5 年 11 月 博報児童教育賞（博報児童教育振興会）
平成 5 年 11 月 文部大臣奨励賞（旧文部省）
平成 7 年 10 月 安曇野文化大賞（長野県安曇野塾）
平成 18 年 3 月 ヘルシーサイエティ賞（ジョンソン・アンド・ジョンソン・カンパニー及び日本看護協会）
平成 27 年 11 月 旭日双光章

学園の指導員から

ゆめを語り導いていただいた四十八年

育てる会 常務理事 山本 光則

昭和五十一年一月、朝日新聞で「一年間の山村留学が長野県で始まる、指導員も募集」という記事を目にし、新宿区神楽坂にある育てる会の事務所を訪ねた。青木先生は当時四十五歳、目を輝かせ、熱く一年間の山村留学を語った。北海道の農村育ちの私は「魅力溢れる斬新な試みだ、これが私の進む道だ」と役に立てるかどうかとも考えず飛びつき、四月から指導員としてお世話になることになった。当時中央道は九月まで開通、十時間以上かけて東京と長野県八坂村（現大町市）を毎月往復した。車中で青木先生は、松本市での生い立ちや、戦後長野県高遠町（現伊那市）で教壇に立ち、

後に東京都墨田区の教員となったこと、受験競争が始まった都市部の学校教育に疑問を感じ「自然の暮らしと体験から学ぶことが重要である」と痛感して三十七歳で教職を辞し「育てる会」を創設したことを話され、漠然と自然の中で楽しく遊ぶ程度の認識であった私には山村留学の原点を学ぶ貴重な時間となった。

「子どもたちに安全で古くから伝わる日本の食事を」と商店に立ち寄って食材を吟味したり、築地の市場まで出かけワゴン車でお目当ての魚や乾物を買って付けたのは自ら厨房に入り、素材のみならず味付けにもこだわる姿勢からは、食が山村留学の一つの重要な柱であることも教えていただいた。また伝統的な日本食にこだわり、麦飯にとろろ汁とちやぶ台の真ん中に湯豆腐の鍋を置き、真ん中にたれを入れた器を温めてみんなにつつかせ、何杯もおかわりをさせた。青木先生のお母上は紙問屋のお嬢さんで躰は厳しかったそうで、「三センチほどしか箸の先つぽを濡らさないのが礼儀だよ」と教えるなど、育った家庭のことについてたびたび耳を傾ける機会があった。一方、戦時中は河川敷でお父上と野菜作りに汗を流し「農民の遺伝子も受け継

いでいるんだよ」と指導員に畑仕事を熱心にすすめた。

島根県で子育て講演会を行い、体験から学ぶことの重要性を語った後のこと。兵庫県の日南海側までの移動を一緒にし、「これから子どもたちと合流し海キャンプをするので眺めて行かれたら如何ですか。近くに民宿がありますよ」とお誘いすると、背広姿で岩礁に立ち眺めておられたが、そのうち竿をもつて釣りを始められた。潮が満ちて波が荒くなってきたので「濡れてしまいますよ」と声をかけると「いいんだいいんだ」と革靴もズボンも膝上まで浸かりながら子どもたちに負けまいと釣りに没頭されていた。このようなお姿も、高齢になられても子どもたちから絶大な人気があり、憧れの眼差しを向けられた所以であったと思う。

大阪の小学校の教師をやりながら日本列島をくまなく歩いた民俗学者の宮本常一さんについて研究をしておられ、「身体に強く擦りこまれた幼少年の生活習慣、故郷の風土」についていつも熱く語り、山村留学と通じるものがあると説明してくださった。また、万葉集などで知られる歌人、柿本人麻呂の諸説ある終焉の地や承久の乱で隠岐に配流された後鳥羽上皇の火葬塚

を訪ね歩いたり、水上勉の文学を巡る若狭地方への旅にもご一緒させていただいた。北海道の農家で育った粗野な私に、礼儀からはじまり周囲に対する配慮等も優しく見守りながら教えてくださった。

半世紀にも及ぶ歳月を振り返ると、子どもたちに笑顔で向き合い、山野で生き活きと取り組むお姿が走馬灯のように浮かんでくる。指導員の心の持ち方についても多くのアドバイスをいただいたが、その中で現在でも強く記憶に残る言葉がある。山村留学草創期の頃のことである。育てる会は運営基盤も指導体制も心もとなく、私の力不足もあって多くの難題に直面し右往左往していたが、「始めたばかりで課題があるのは当然だ。この取り組みにはゆめがある。青少年に必要な教育運動だ。前をむいてやり抜こう」とポジティブ思考で励まし導いてくださった。青木先生は亡くなる直前まで指導員の道しるべとなる資料編集に心血を注ぎ、「山村留学の原点を伝える資料を作っているよ」と電話をいただいた。まもなく山村留学創設五十年を迎えるが、次なるステップに向けて先生の教えを若い世代へ伝えていきたい。

青木先生

八坂美麻学園統括主任 赤坂 隆宏

青木先生の逝去から、約半年が過ぎた。私の実感としては、いまだ青木先生が亡くなったというリアリティがないというのが正直なところ。コロナ禍で3年程は八坂のセンターにも青木先生の来訪がなく、しばらく会えないままにお別れとなった。そして、9月の葬儀でも外受付の係員として慌ただしく終え、感傷に浸る間もなく短時間でご焼香のみで葬儀場を後にした。

一つ、青木先生の逝去直後に、八坂のセンターで起きた出来事を記しておきたい。逝去の知らせを聞いた翌々日、センター前の大山桜の太い分枝が、根元部分からセンター側に向かって静かに倒れた。夏の短期活動実施中のこと。木が倒れた午後は雷鳴とともに土砂降りとなり、午前中まで樹の下で活動していた子どもたちは避難し室内にいた。八坂での大山桜の開花時期は、一足遅い春が訪れる4月下旬から5月初め。この時期になるとセンター前庭で、毎年のように青木先生

が話していたことを思い出す。この大山桜はセンター建設時に植えたこと。そしてこの信州に訪れる少し遅い春に、桜の花びらが舞う下で味噌を仕込み、花びらも一緒に仕込むことから、この辺りでは「さくら味噌」とも呼んだこと。

この八坂の地で山村留学がスタートして今年度で48年目。その際に植えられた大山桜が、奇しくも青木先生の逝去と重なるタイミングで、しかも静かに倒れたこと。直前まで樹の下で賑やかに活動していた子どもたちを、青木先生が天から雷鳴と雨で知らせて避難させてくれた、そんな目に見えない力が働いていたのか思えない事象が、確かにここで起きた。そう、ここは、青木先生の魂が宿り続ける場所なのだ。

さて、青木先生のこと。私が入職した21年前、青木先生は「理事長先生」として指導の一線からは退いており、八坂のセンターに常駐ではなく、親子行事や短期行事等の度に滞在しては、子どもたちや保護者、我々と過ごす機会を持っていた。青木先生がセンターに来ると、理事長デスクに座っていることはあまりなく、厨房職員に声をかけ、裏のシイタケや味噌の様子

を見たり、施設内の不備を見ては大町へ降りて材料を仕入れ補修をしたり、食堂の観葉植物を植え替えたり、諏訪さんや近所の農家さん宅へ行ったりと、とにかく足を動かし、声をかけ、あらゆることに即座に着手していた。そして指導者には、到着した直後から「今日はこれ子どもたちに話すぞ」「保護者にこれと話したいから時間くれ」と、来訪する際には必ず伝え話す話題を持参し時間確保の指示があった。例えば令和元年、5月親子行事前には、こんなメールが届いた。

「親子山菜採りに参加するからには、何か有効なことをしたいと思うのです。それで、かねてから考えていたことですが、一度、県歌「信濃のくに」について、詳しい説明をしたいと思いますのです。もし、夜にでも、時間が取れるなら、説明をしたいと思いますのです。」

そして、いざ子どもたちや保護者の前に立つと、時節の自然や文化のこと、昔のエピソードや修園生のこと、おすすめの本や山村留学でこれから行うべき活動展開のこと、育てる会の将来展望のこと等を、腰に手を当て、お馴染みのスタイルで意気揚々と話が始ま

る。そんな青木先生の刺激ある尽きない話題を聞くことを、毎回楽しみにしていたのは私だけではなかったはず。

目じりを下げ、少し首をかしげながら、絶妙な間と腹式呼吸で声と話題のバランスを整え、子どもたちの神経を集中させながらテンポよく問いかける、そんな青木先生の語り。語りの内容は、常にこれからに向けた課題を提起し、刺激と示唆に満ち溢れていた。

最後に私的な感傷を一つ。令和元年4月末のこと。まだ幼い子どもを連れ、家族で富士見のすずらん山荘を利用したいと申し出たところ、届いたメール。

「21日、家族で山荘に泊まるそうだね。ちょうど、20日、かつてのリーダーたちの懇親会があり、風呂を入れている。残しておくので、その風呂を使ってくれ。やはり、山荘の風呂に入ったほうが落ち着くから。朝風呂も入れる。私がいるので、風呂の世話をしやるから、安心して来てくれ。」

この時が家族で会った最期となった。今、言葉にならない思いが込み上げる。青木先生。本当に、何から何まで、大変お世話になりました。